

Title	一八三〇年代におけるイギリス労働運動：労働党史研究序説（中）
Sub Title	British labour movement in the 1980's : introductory study to the history of the Labour Party
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.6 (1955. 6) ,p.447(25)- 461(39)
JaLC DOI	10.14991/001.19550601-0025
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550601-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550601-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うな矛盾があり得ないことは、次のような考察から判明する。まずわれわれは、第一式を除いた(7)の $m-1$ 個の方程式を $m-1$ 個の變數  $P_2, \dots, P_n$  について解くことができる。それらの解はパラメーター  $P_1$  の一次函数であり、かつその中に含まれる係数はすべて第一式の係数からは獨立であるから、第一式に  $a$  を選ぶか  $a'$  を選ぶかによつて影響を受けぬ。さて、これらの  $P_2, \dots, P_n$  を第一式に代入すれば、われわれは遂に  $P_1$  のみの一次式を得、それに  $a$  か  $a'$  を交替的に代入することによつて、その大小を較べることができるわけである。もし  $a'$  を代入することによつて  $P_1$  が高くなれば、他のあらゆる  $P_j$  も高くなるから、 $a'$  の  $a$  より劣ることは歴然たるものであり、しかもその結論は  $\sigma$  の大いさによつて影響を受けぬ。かくして、われわれの定理は、第一産業が  $a$  と  $a'$  との間に選擇を有する場合について確立される。各  $j$  産業がそれぞれ  $a_j$  列と  $a'_j$  列との間に選擇をなし得る場合には、われわれは同様の推論を反復することによつて、列集合  $a_1, a_2, \dots, a_n$  が、その中の一つもしくはそれ以上の列に  $a'_j$  を代入したいかなる列集合よりも、すべての  $P$  を小ならしめることを證明することができる。線形計畫もしくは活動分析の用語で言えば、 $P$  に關する dual problem は、 $C$  の如何にかかりなく、他の活動を  $\langle \text{dominate} \rangle$  する活動をもつのである。

(つづく)

追記 本稿を書き終えてから、私は東大古谷弘助教授の「レオンティエフ・モデルの一考察」(金融經濟一九五五年二月號)を手にした。ここに記して、本稿を読まれる人々の併讀を希望したい。

## 一八三〇年代におけるイギリス労働運動

—労働黨史研究序説— (中)

飯 田 鼎

### 一、一八三〇年代の労働組合運動

—オーエン的世界の終焉—

#### 二、いわゆるチャーチストの時代

(一) 救貧法の改正

(二) 都市の状態

(三) アイルランド人の移住とその影響

わたくしはさきに、イギリス労働運動の性格を改良主義と規定し、その思想的な根據となるものが、オーエンの社會主義とベンサム功利主義であり、この二大思潮の歴史的な發展のなかにこそ、労働黨のイデオロギーの萌芽的な姿を發見しうることを力説した(本誌一月號拙稿の第二節を参照されたい)。まことにオーエン主義とベンサム主義とは、英國社會主義の理論的思想的支柱であるといえよう。云うまでもなくこれらの思想が、労働者階級の頭脳にしみとおり、彼等の行動の上に大きな影響を及ぼすようになるまでには、十九世紀の大部分をついやさなければならなかつたし、たえずいくつかの障害に出會い、

一八三〇年代におけるイギリス労働運動

二五 (四四七)

これと對決しなければならぬ運命にあつたのだ。資本主義の順調な發展という、いわばめぐまれた環境は、プロレタリア階級を、はげしい苦悶の一時期とともに生み落とすと同時に、また、資本主義の恩恵の一部にあずかるプチ・ブル層をも排出させる。彼等はブルジョア急進主義——ここではベンサム主義——のいわばチャンピオンとして、資本家勢力の代辯者となり、依然として根強い保守反動勢力に對抗するために、労働者階級の團結の力を要求し、これを利用して、さらに労働運動のものにも、大きな影響をおよぼそうとする。彼等が労働運動の組織者として登場し、労働者に團結の力を説くのは、労働者階級の勢力を革命的なものにしようとするためではない。彼等はみずからその目的——たとえば選挙法改正——を達してしまつたのちは、労働者階級の革命的な力をおそれ、むしろこれを弱めようとする役割を果そうとする。ベンサム主義者フランドン・プレスは、まさに、そのような意味で典型的な人物であつた。

オーエンがプレースの主張に反對であつたことは、プレース

がオーエンの社會主義に反對であつたと同じであるが、しかも丁度同じ年に生れたこの二人が、各々その異なる思想と信念をい<sup>(1)</sup>だいて、その當時の労働組合運動に、深甚な影響をあたえたといふことは、まことに興味深いものがある。けだしオーエンの英國労働運動において果たした役割は、あたかも「彗星の如くにして來り、また彗星の如くにして去つた<sup>(2)</sup>」といわれるほどはなばなしいものであつたと同時に、短いものであつた。これに反し、プレースの果たした役割は、きわめてじみではあつたが辛抱強く根強く労働組合運動に影響をあたえることであつた。云うまでもなく、オーエンの思想的な影響が、一八三〇年に、衰えてしまつたというわけではなく、それどころか、チャーチスト運動の初期まで、オーエンの影響が、色こく認められることは、のちにのべるところであるが、それにもかかわらず、一八三〇年代には、オーエン主義はその矛盾をあきらかにし「オーエンの時代」は過去のものとなりつつあることを感ぜしめていた。かつて一八二〇年代福音として多くの知識人から歓迎されたオーエンの主張は、やがて「みじめな三十年代」そして「飢餓の四十年代」の到來とともに、かつてのその進歩的な性格は逆に時代おくれなものとなり、その結果は、オーエン自身とオーエンの弟子たちとの思想的感情的な葛藤となつてあらわれたのであつた。すなわち、このオーエン主義の危機——オーエン自身と、オーエンをとりまく弟子たちとの意見のくいちがいは何よりも、あのグランド・ナショナル (Grand National Con-

solidated Union) の成立と衰亡のなかに、はつきりと讀みとることが出来る。實に一八三〇年代におけるグランド・ナショナルの歴史的な破局こそ、オーエン主義にとつてはさげがたい弔鐘であるとともに、英國の労働運動にとつては、新しい時代の黎明を告げる前ぶれであつたのだ。わたくしはつぎに、グランド・ナショナルの破局のなかにオーエン主義の歴史的な意義と限界とを探り、それがどのように轉化して労働運動のなかに生きつづけていつたか、この點について、ややくわしく論じたいと思う。

一八三〇年代における、いわゆるグランド・ナショナルの成立前後の事情については、すでにウェッブ夫妻はもとより、コールやハモンド夫妻もくわしくふれており、わたくしがここに事新しくのべる必要はない。

ただ、イギリス労働黨の思想的理論的な性格を、歴史の流れのなかに把握するために、そのいとぐちとしてオーエン主義とベンサム主義とを發見し得たわたくしは、こゝでもこの二つの思潮——労働者階級の上に重大な影響をあたえている——を見失ふことなく、敘述をすすめようとする。

一八二五年、團結禁止法が廢止された年の八月に始つた慢性的な不況は、一八三〇年代に至つて、ようやくその深刻な影響を労働者階級にあたえた。まさに「一八三〇年に、スキング一揆がもえ輝く穀木の炎をもつて、農業英國の表面下にも、また工業英國の表面下における如く、窮乏と憎たんなる反抗的不满

とがさかんにもえ上つてゐることを、支配階級に示したとき<sup>(4)</sup>」労働者階級は、何か革命的な事件の切迫してゐることを豫感したであらうし、また支配階級は同時に、労働者階級の成熟による脅威、しかもこれを彈壓しようとするおさえがたいあせりを經驗したことであらう。このような支配階級の労働者階級に對する脅威と警戒、しかもそれにもかゝらず、大草原の火の如くに、延々とひろがる全國的な規模による労働組合の組織を眼のあたり見て、當時の支配階級はどのように感じたであらうか。

一八三〇年五月、マンチェスターの市區治安官は、サー・ロバート・ピールにあて、つぎのような手紙を書き、警告をあたえたといわれる。

「長らく大きな害悪とみとめられ、しかもそれをさまたげるのに、もつともむづかしいものである労働者の團結は、最近この地方で、非常におそろべきしかも組織的な形をとつてきましたので、われわれは、貴殿の前に、そのもつともおどろくべき特徴のいくつかを申し立てることを、われわれの義務であると感じます……この國の紡績工の代表委員會は、その雇主たちに對する一般的な團體の行動を指令するために、マン島において(イングリランドとアイルランドの間にある島……筆者) 年次集會の基礎を定めました。そしてその指令を、彼等は各地區や分科委員におしひろめるのです。この指令に對しては、もつとも意味あり氣な尊重というものが見られますし、また紡績工一人あたり、週一ペニーの徴收は、喜ん

一八三〇年代におけるイギリス労働運動

二七 (四四九)

で支拂われております。これは巨額の金となり、また強力なエンヂンともなつて、主としてその雇主に對してストライキをした人々を助けるために、週一人あたり一〇シリングの割合でも、喜んで委員會の指令に従つて……」と。

このようにして労働者階級の革命的な氣運というものは、次第にたかまつていつたが、しかし例えばこのマンチェスターを中心とする紡績工たちの組合連合運動にしても、必ずしも挑戦的なものではなく、もしくは資本制度の打倒を目的としたものではなかつたといふことは注目されねばならない。アイルランド出身のすぐれた組織者ジョン・ドハーティ (John Doherty) は、その國民労働擁護協會 (National Association for the Protection of Labour) をつて、一産業だけではなくあらゆる種類の賃金労働者の國民的な組織を考へていたにせよ、その目的とするところは、賃金値上げをストライキによつてかちとらうというよりは、あくまでも資本制生産に在<sup>(6)</sup>内的な賃金低下の傾向に必死になつて抵抗していかかのである。

このことは、國民労働擁護協會というこの名前からも充分うかがい知られるところであつて、協會が全英國の労働者階級に呼びかけた文章のつぎのような一節には、このことがひしひしと感じられぬだらうか。

「他のすべてのもの——知識・富・市民的宗教的自由・教會精神病院そして牢獄——が増大してゆく一方、労働者の環境がたえず悪くなつてゆくといふのは、一體どういふわけだらうか。

食物や衣類などの唯一の生産者である人が、他の者がよくなくつてゆくというのに低下する運命にあるように見えるとは、<sup>7)</sup>ともあれドハーティの努力によつて、全英國の労働者階級を一つの強力な組織にしようとする方向が見出され、これがやがてオーエンのグランド・ナショナルのための萌芽となつたことは明らかである。國民労働擁護協會の最初の書記となつたドハーティは間もなく、ランカシャー、チェンブリー、ダービー、ノッチンガム、リースターなどにおいて、百五十もの組合をその傘下にあつめ、協會は建築業をのぞけばほとんどあらゆる職種をふくみ、二萬人に達する會員を得て、その資金も一八六六ポンドの巨額にのぼつた。だがこうして發展した協會も一八三一年四月、新書記の百ポンドという資金横領を契機として、協會の資金は、各組合が保持すべきであると考えられるに至り、協會の組織的な支配の力は、資金の面から次第にくづれていつた。そして一八三一年の終りには、その勢力は急速におとろえていつたといわれている。

しかしながら、國民労働擁護協會の衰亡と指導者がドハーティの没落は問題ではなかつた。重要なことはそれがあたえた影響の深刻さと、足跡の偉大さであつた。協會の廢墟には、建築労働者組合が、たくましく成長していつたのだ。建築業がもつその多様な職種、たとえば指物師、石工、煉瓦積み職人、左官鉛管工、ペンキ職および大工の連合組合であつた建築労働者組合連合は、まれに見る強固な團結をもつて、一八三二年にはラ

働者たちと呼びかけているのは、まことに印象的であらう。

「おごれる資本の力は、今や試験されるであらう。すなわちわれわれは間もなく、資本があなた方の労働をうばわれたとき、それが価値のないものであることを發見するであらう……」と。

これを、ホジスキンの「労働擁護論」のなかに見られるつぎの文章と比較すれば、その關係は明らかであらう。「労働者なくしては、資本家自身の熟練と労働は、何らの役にも立たないが、しかし労働者は資本家なくして、安樂に、また裕福に生活しうるであらう」と。すなわち、われわれはここで、オーエンのグランド・ナショナルが出現する直前、現象的にはオーエン主義が支配的な勢力を振つていると想われた時期にさえ、組合運動の指導者たち一部には、階級調和を説くオーエンの主張に批判的な考え方が、芽生えはじめていたことを記憶しなければならぬ。この事實こそ、急速に成立發展したグランド・ナショナルが、何故に、瞬間のうちにくづれ去らなければならなかつたか、その大きな理由の一つではなかつたらうか。

さて、こうして發展した建築労働者組合連合のほかに、ドハーティによつて一八三〇年に組織された陶工組合は、一八三三年の秋には、ニューキャッスル・オン・タインやダービー、そしてプリストルやスウィントンなどに支部をもち、組合員の数は八千人に達するほどの勢力となり、次第に全國的な組合運動への關心が、労働者階級の間にも、たかまつてきた。このころに

一八三〇年代におけるイギリス労働運動

ンカシャー地方からミッドランドの諸都市にかけて、急速に根を張つていつた。このようにして、一八二九年ドハーティとジョン・フォスターの努力によつてはじめられた全國的な連合組合への企圖は、三年後の一八三二年——選挙法改正の年——建築労働者組合連合によつて、ようやく資本家側に抵抗しうるだけの力をもつことができた。一八三三年九月、建築労働者組合連合は、マンチェスターにおいて年次大會を開いたが、その席上オーエンも演説を行つて、「労働はすべての富の源泉であること、富は労働者階級の間の全般的な契約によつて、生産者の手に保有されるべきである」とのべたのであつて、この頃からオーエンの労働組合運動への關心は、次第に強まつていつたかのようである。事實、建築労働者組合連合の指導者のなかには、オーエンの影響を受けた者も居り、例えば、有名な建築労働者のギルド・ホルの設計をした建築技師ハンサムもその一人であつた。ギルド・ホルが、一八三三年十二月五日、講堂や子供のための教育施設をもつものとして著手されたことを見ても労働者に対する啓蒙と宣傳を叫ぶオーエンの影響をうかがい知ることができ、しかしすでにその當時、オーエン主義とは別に、例えばのちにリカード一派社會主義者と呼ばれたトマス・ホジスキンの思想が、直接間接に指導者たちの間に信奉されるに至つたことは想像に難くない。たとえば建築労働者組合連合の機關紙「パイオニア」が、熱烈なオーエン主義者ジェームズ・モリソンの手によつて編集されながら、つぎのように勞

なると、「労働組合」(“the Trades Union”)という言葉がある種の恐怖を交えて、資本家的な新聞に書き立てられたといわれ、支配階級にとつては、労働者はかつてのようになり、弱い憐れむべき存在ではなくなり、何よりも階級的な自覺に目ざめ、廣汎な組織をもつて、自分たちの前に立ちはだかる存在であるかのように見えた。一八三〇年、當時、内相であつたメルボルンは、ハーバート・テラー卿にあてて、つぎのように書いたといわれる。

「わたしが、昨年十一月、はじめて入閣したとき、イングランド北部およびわが國の他の地方で、賃金値上げその他の目的をもつ労働組合について、ロバート・ピール卿は、わたしに指摘してくれました。つまりわたしが、彼と、その當時の國の状態について、彼ととりかわした會話のなかで、ピールは、労働組合こそ、われわれが闘わなければならぬ、もつともおそろしく困難な、また危険なものだと云つたのです」と。

このようにして、當時の支配階級が、労働組合運動の全國的な規模への飛躍に對し、極度の警戒と恐怖をもつてのぞんでいるとき、こういふけわしい空気を背後に感じながら、一八三四年二月、オーエンは、ロンドンにおいて特別代表者會議を召集し、ここに全國労働組合大連合はその緒についた。だが、オーエンの心のなかでは、グランド・ナショナルの目的は、生産者階級の全體を、一つの大きな團體にふくめることであつたのは

二九 (四五二)

勿論で、賃金の低下という資本主義の必然的な傾向に對して、勇敢に抵抗し闘うといふ方向に、労働者を組織しようとする熱烈な意志はなかつた。

云うまでもなく、社會主義者としてのオーエンが、資本主義制度の害悪を認識し、これを變革することによつて、はじめて労働者が、生活の向上を期待しうることは熟知していたけれども、それはあくまでも、労働者階級がみずからその資質を向上し、平和的な手段と説得によらねばならぬという信念は、依然として不動であつた。従つてオーエンが、グラント・ナショナルの運動のなかに、自分自身の思想と信念とを吹き込もうとしたことは當然である。すなわちオーエンは、グラント・ナショナルを主體として、労働者階級の力を結集し、平和的な手段によつて、社會革命をなしとげようとする一方、その性格形成論環境論、教育論などを労働者階級におしつけようとした。しかしながら、オーエンの平和的樂觀的な主張とはまったく反對に資本家および政府のグラント・ナショナルに對する壓迫ははげしくなり、労働者に賃金の切り下げを強いるどころか、労働組合をもふくめていかなる團體にも、「誓つて加入しない」という文書に、署名することを、労働者に要求した。ここにおいて有名な「ダービーのストライキ」がおこつたのである。そして、このダービーの闘争は、グラント・ナショナルの資金を空にしその運命をかけて闘われたのであつたが、その上、ドーチェスター事件——労働運動を彈壓する口實として、政府は、罪のな

い六人の農業労働者を、七年の間流刑に處した有名な事件<sup>(13)</sup>——は、次第にグラント・ナショナルの根底をゆるがし、こうした事件を背景にして、オーエン主義はやがてその時代おくれの性格をかくしえなくなつた。

さきにも述べたように、オーエンの社會主義を生み出した時代は、ナポレオン戦争直後の、いわば飢餓と大恐慌の時代であつた。産業革命が、まだ巨大な地ひびきをたてて進行しつつあり舊體制の全面的な破壊と新秩序の建設とが、新興資本家階級の勃興とプロレタリア階級の創出とを通じて、着々と進行しつつあつたこの時代には、労働者階級はまだ階級意識がうすく、事實それはまだ階級として形成される以前の状態であつた。のみならず、團結禁止法によつて労働組合運動はきびしく制限されたため、一八一〇年代から二〇年代にかけては、労働者階級は、當時の急進主義者や知識層にとつて、少くとも保護され、啓蒙されるべき存在であつたと云えよう。ひとりオーエンだけではない。例えば初期工場法運動に先鞭づけた者こそ、ほかならぬ保守主義者サー・ロバート・ピールであつた。またその後の工場法改革運動に、博愛主義者として活躍したリチャード・オーストラリーやミカエル・サドラー、そしてアシユレー卿なども、大體において保守的な思想の持主であつたにもかかわらず、彼等がこの運動に専心できたのは、労働者階級が、少くも弱者の立場にあり、保護されるべき存在であり、人道的なあわれみの対象であると考えたからであつた。労働者階級を経済的社會的

な弱者と認めて、これに同情し、新しい法律を制定してこの弱者を強者の壓力から保護しようとしたこれら人道主義者たちの立場は、オーエンの思想と必ずしも無縁ではなかつた。

ところが一八三〇年代になると、労働者階級は、もはや保護され同情されるべき存在であることをやめて、次第に産業革命の落し子、すなわち「恐るべき子供たち」としての面目を明らかにしはじめた。一八三二年の選挙法改正は、まさに労働者階級の容易ならぬ力を示したものであつた。そして一八三〇年代になると、労働者階級出身のすぐれた指導者があらわれはじめさきにも述べたジョン・ドハーティもその一人であつた。この労働者出身の新しい指導者たちは、あの團結禁止法のはげしい彈壓と苦難の時代をくぐつて、はじめて、一八三〇年代の組合運動の昂揚の時代を迎えたのであつて、階級闘争のいたましい體驗を通じて、彼等の意識は、次第に革命的なものにまでたかめられていつたことは云うまでもない。こうして急進的になつていつた指導者たちのなかには、オーエンの思想に大きな感化をうけた者も少くなかつたが、意識のずれと、思想的な分裂はいかんともしがたかつた。このようにして、一時は熱烈なオーエン主義者であつたジェームス・モリソンやJ・E・スミスが、機關紙パイオニヤークリシスにおいて、オーエンと衝突して、ついに訣別した結果、ここにグラント・ナショナルの危機と崩壊とは、一層速められたのである。想えば、平和主義と博愛主義という、オーエンの一八二〇年代の旗じるしは次第に色

あせて、戰團的労働組合主義にとつて代られたのだ。

コベットやヘンリー・ハントなどの急進主義者も、一八三五年には死んで、戰團的なファイアガス・オコンナーが脚光をあびて登場した。ヘザリントンやウィリアム・ラヴェット、そしてブロンテール・オブライエンのように、オーエンの影響のうけた人々は、次第にオーエン主義からはなれ、チャーチスト運動に入つていつて、オーエン主義はなおも生きつづけたけれどもその影響は主流からそれていつたのである。一八三四年になると、オーエン自身も、政治的産業的な問題からはなれて、専ら道徳的宗教的な世界に没頭するようになった。オーエンは、みづからその使命が終つたことを感じたであらう。だがオーエンは年老いオーエン主義は労働組合運動を支配しなくなつたけれども、彼がその弟子たちにあたえた感化は、けだしはかり知れないものがあつた。彼の屍を超えて進むことを誓つた彼の弟子たちは、彼等が恩師から學んだ思想と理論とを、ただ經濟的な問題にだけでなく、實に政治的な諸權利の獲得のための闘争の武器に轉化しなければならぬことを知つた。彼等はみづからひとつの新しい時代に入つていゝことを感じた。チャーチストの時代がすなわちこれである。

(1) オーエンもブレイスも、ともに一七七一年に生れてゐる。そして、そしてオーエンはブレイスよりも四年長く生きて、一八五八年に死んでゐる。

(2) 上田貞次郎博士著「英國産業革命史論」五七頁。

- (3) ウェップ夫妻やコールの著述のほかに、わが國では、五島茂教授の「イギリス産業革命社會史研究」には、この點について、きわめてくわしくのべられている。
- (4) マルクス「資本論」高番譯第一卷二冊分六六五頁。
- (5) S. and B. Webb; *History of Trade Unionism*, pp. 118—119.
- (6) 國民労働擁護協會が、賃金値上げを叫ぶよりも、その低下をくりとせざるに、努力したという事實は、一八三〇年の七月二十八日、二十九日、三十日の三日間わたつてマンチェスターで開かれた代表者會議において、きめられた決議によつて明らかであらう。すなわちその第十四條はつぎのように規定してゐる。
- That the funds of this Society shall be applied only to prevent reductions of wages, but in no case to procure an advance. Any trade considering their wages too low may exert themselves to obtain such advance, as they may think necessary and can obtain it by their exertions.
- G. D. H. Cole; *British Working Class Movements*, *select Documents*, 1789—1875, p. 253.
- (7) Webb; *ibid.*, p. 120.
- (8) 指導者下ハートイがランカシャ委員会と喧嘩した後の彼の活動については、實は専門家の間にも異見が多く、今

- なお不明の點が少くないといわれる。この點については、D. H. コールは、最近注目すべき勞作を發表してゐる。
- G. D. H. Cole; *Attempts at General Union, A Study in British Trade Union History*, 1818—1834.
- (9) Thomas Hodgskin, *Labour Defended against the Claims of Capital, or the Unproductiveness of Capital proved with Reference to the Present Combinations amongst Journeymen*, By a Labourer, London, 1825.
- 鈴木鴻一郎譯「労働擁護論」七九頁。
- (10) Webb; *ibid.*, p. 133.
- (11) Webb; *ibid.*, pp. 138—139.
- (12) G. D. H. Cole; *Robert Owen*, 1925, p. 213.
- (13) この事件については、どの本も多かれ少なれられてゐるが、わが國においては、五島氏の前掲書はあげてこの問題に集注され、劃期的な大作である。
- (14) Hutchins and Harrison, *A History of Factory Legislation*, 1911, pp. 33—34.
- (15) G. D. H. Cole; *Robert Owen*, p. 221.
- 
- 「都市労働者」、「農村労働者」そして「熟練労働者」の三部作をあらわし、英國産業革命史の研究に、不滅の金字塔をうち

たてたハモンド夫妻は、これらの續篇として「チャーチストの時代」を書いていることは、知らぬ者もあるまい。<sup>(1)</sup> 歴史學への深い理解と、古代ギリシャ・ローマ文明にかんするなみなみならぬ教養とをかたむけて書きあげられたこの書は、チャーチストたちの時代を描いてあますところがない。ただその描寫の手法において、歴史的理論的であるよりは、むしろ心理學的な考察に重點がおかれている點に問題はあるが、チャーチストおよびチャーチスト運動の社會經濟的、政治的宗教的背景をさぐる貴重な文獻の一つであるといえよう。わたくしは、ハモンド夫妻の見解には、やや批判的であるが、一八三八年前後からはじまるこの運動の社會的背景が、どのようなものであるかを考察したいと思う。

一口にチャーチストの時代と云つても、それは特定のいつきりした一時期を指すのではなく、主として一八三〇年代から四〇年代にかけての、いおぼ嵐と熱狂の時代、産業革命という苦悶を経験して、近代資本制社會が、一應の體裁をととのえながらも、その内部には、救いがたい貧困、和解しがたい憎悪と反感が、階級の分化を通じて、益々増大していつた時代と考えられよう。一八二〇年代までは、労働者階級は、さきにのべたように、資本家階級に起ちむかうほどに成長しておらず、従つて労働者階級の間には巨大な政治運動がおこりうべくもなかつた。それゆえまた、チャーチストの時代が闘争の時代であつたとすれば、オーエン等が活躍した一八二〇年代は、労働者階級と資

本家階級との間に、闘争よりはむしろ温情が支配した時代であつたといえよう。温情は、資本家階級の良心の苦痛を和らげる鎮痛劑であるとともに、労働者階級にとっては、その心を階級闘争へかりたてるのをさまたげようとする麻痺藥であつた。だが一八三〇年代になると、その様相は變つてきた。労働者階級のたくましい成熟だけではない。彼等のもつ新しい意識、産業革命がもたらした數多くの害悪への認識と、これを改革しようとする階級的な熱情が、今までのように、上からではなく下から、しかも政治的な主張をかかげてわき上つてきたからである。チャーチスト運動は、少くも、このような具體的な現實的な認識にささえられていたと云えないだろうか。わたくしはこれから、チャーチストをつくり、これを起ち上らせるに至つた時代的な特徴のいくつかをのべるであらう。

#### (一) 救貧法の改正

十九世紀初頭における英國政治史上の大事事件といへば、一八三二年の選挙法改正をあげなければならないが、救貧法の改正も重要である。救貧法の改正は經濟上の大改革であり、労働者階級の生活に直接大きな影響を及ぼしたのであつた。選挙法改正に際して、労働者階級が選挙権をあたえられなかつたことも彼等をかりたててチャーチスト運動に専心させた重大な理由であつたが、一方救貧法の改正は、一時的ではあつたにせよ、労働者階級の生活を貧窮のどん底におとし入れ、彼等の反抗を絶望的なものにした。それは選挙法改正と同じく、當時勃興の途

上にあつたブルジョア階級の要求に應ずるものであつたことはいうまでもない。ただその相異は、選挙法改正の結果が、労働者階級にとつて、いわば「裏切られた改革」として、その打撃は、間接的であつたのに反し、新救貧法は、今まで當然の権利のようにうけとられてきた恩恵としての院外救助が、特別の例外のほかは、うけられないことを規定したために、この上もない深刻な動搖を労働者にあたえた。

初期救貧法の歴史については、すでにイーデン、ニコルズ、ウェップ夫妻およびアンシュレーなどの先學によつて探求されてお<sup>(2)</sup>り、のべる必要もないが、わたくしはただ、救貧法が當時の労働者階級に對してもつていた意義と、その改正にともなう影響についてふれるであらう。十八世紀以前においてさえ、救貧法、すなわち院外救助の制度は重大な社會問題であつた。マルクスはつぎのように云つてゐる。「民衆に對する強行的な收奪行程は、十六世紀における宗教改革と、それにともなつて行われた寺領の絶大な盜掠とによつて、おどろくべき新刺戟をあたらされた。宗教改革の當時カトリック教會は、イギリスにおける大なる土地部分の封建的所有者であつた。修道院その他に對する抑壓は、そこに居住していた人々を、プロレタリアの隊列になげこんだ。そして寺領そのものは、大抵みな王の強慾な寵臣にあたえられるか、または投機的な小作農業者や市民たちに棄て値で賣りとばされることになつた。これらの人々は、舊來の世襲的な寺領小作者を一括的に驅逐して、彼等の經營を大ま

とめに総合してしまつた。貧困な農業労働者は、従前教會に納められる十分の一税の一部に對する所有權を、法律上保證されていたのであるが、今やそれは暗々裡に沒收されることになつたのである。エリザベス女王は、イギリスの國內を一巡したのち、叫んでいわく、「窮民はいたるところに見られる」と。彼女の治世四十三年に至り、政府はついに救貧税を實施して、被救恤的窮乏が、現實に存在していることを、公認せしめざるを得なくなつた」と。封建社會の崩壞にともなつて創出されたこれらの窮民に對して、院外救助の制度が、失業對策のような役割を果したことはもちろんであるが、それは何よりも、これらの貧民が暴徒化するのを、未然に豫防するために考案された便宜的な方法であつた。支配階級は、これらの窮民に對し、殘虐法といわれるきびしい刑罰によつて彈壓するとともに、他方ではこのような恩惠的な政策をもつて臨んだのである。ギルバート條令などによつて、院外救助はきびしく制限された時期もあつたが、大體において、十八世紀には、貧民が、救貧院に入らずに扶助をうける慣習が支配的であつた。とくに十八世紀末、フランスとの戦争の結果として、物價は騰貴して、とりわけ南部の農業労働者の生活は苦しくなり、健康な男子労働者の賃金では到底生活できなくなつた。このためにやがて、賃金のこの不足分は、救貧税によつて補われることとなり、ここに歴史上有名なスピナムランド・システムが成立したのである。だが増大する救貧費は益々貧民を増加させ、貧民の増加は、救貧費

を益々増大させるという悪循環は、資本制社會の成立そのものに起因することは事實であるとしても、それは、資本のあくことなき蓄積を求める新興ブルジョア階級にとつては大きな負擔であつた。彼等は院外救助の廢止によつて、當然もえ上るであらう労働者階級の反抗には脅えながらも、斷然これをやめる決心をかためた。ナッソウ・シーニョアのような經濟學者で資本家の代辯者も、救貧法審問委員會の有力なる一員としてこれを主張し、一八三四年八月、ついに新救貧法は成立した。労働者階級の不滿は云うまでもない。農民運動の指導者ウィリヤム・コベットはつぎのように云つた。「われわれは、すでに労働者の怒れる聲が田野や路地にみちているのをきく。すでに彼等の脅威の聲はきかれる。わたしはたしかに、おそるべき大變動がせまつていと信ずる……」と。さきにのべたように、南部におけるスピナムランド制度の結果は、却つて貧困をおしひろめ、多くの救貧區における農業労働者を、一種の公然たる農奴に墮落させるといふ、いわば悪い面だけがはつきりあらわれたのだが、北部の工業地帯ではそれは別の形をとつてゐた。つまり、北部では、スピナムランド・システムは、強制的に行われ、當時低賃金のために飢餓線上にあつた手織工に對し、生活保護の役割を果したものであつたことは注意されねばならない。すなわち、南部の農業労働者は、院外救助をうばわれても、鐵道建設や農場などで職を得ることができたが、北部では、それは直ちに、大量の失業者の發生を意味し、救貧院に入らなければ

扶助をうけられないという事實は、重大な社會問題となるに至つた。従つて新救貧法に反對したのは、ひとり労働者階級だけではなかつた。これが契機となつて暴動にまで發展するのをおそれた人々も少くなかつたのだ。地主、牧師、醫者、専門家や製造業者までも、不當な處置として新救貧法に反對したといわれる<sup>(3)</sup>。

新救貧法に對する抵抗は、色々な形をとつてあらわれた。ウエスト・ライディングや南ランカンシャの主要な町々では公開の集會が開かれ、新救貧法反對のための組織的な運動が、くりひろげられていつた。ウエスト・ライディングとランカンシャは、この運動のもつともはげしいところであつたが、しかしそこだけではなかつた。一八三七年十一月、ブラッドフォードで一八三八年五月ハッダースフィールドで、同年八月ディウスベリで、また同年十一月トットモルデンで暴動がおこり、ブラッドフォードでは、軍隊を出動させるほどの騒ぎにまでなつた。そしてこれらの事件は、院外救助がいかに廣範圍に行われ、根強いものであつたかを如實に物語つてゐる。新救貧法は、云うまでもなく、自由放任主義を信條とする自由黨の重要な政策の一つであつたが、これに反對し攻撃を加えたのは、ひとり労働者階級や知識人だけではなかつた。保守黨は、「時こそ至れ」とばかり、自由黨を攻撃する絶好の機會を得たのであつた。リーズやハリファクス、ウェイクフィールドやリヴァプールそしてボルトンなどの保守系の新聞も、こぞつてこの新救貧法に反對

し非難し、あたかもチャーチストと同じようなげん論調をもつて政府の處置を非難したのである。このようにして、新救貧法に對する反對運動は、労働者階級のはげしい抵抗をうけ自由黨政府のはげしい彈壓と保守黨の政治的なかげひきを、とを背後に、チャーチスト運動のなかに吸収されていった。オーエンのグラント・ナショナルの運動が、チャーチスト運動の前ぶれであつたとすれば、この新救貧法反對運動は、その序曲であつたとはいえないだろうか。

(二) 都市の状態

一八三〇年から四〇年代にかけての英國の工業都市の状態については、すでにギヤスケルがするごとく指摘したところである。「英國の産業人口」の著者P・ギヤスケルは、自由黨員ではあつたが、エンゲルスも指摘しているように、これに書いた當時の彼は、現實の状況に活眼を有し、殊に工場制度に公平な考えをもつていたといわれる。ギヤスケルのこの書は、エンゲルスによつてその名著「英國労働者階級の状態」にしばしば引用され、またわたくしも相當くわしく紹介を試みたので、ここではただ、大都市における労働者階級の状態、とくに住居の状態をあきらかにすることによつて、チャーチスト運動に彼等をかきたてた劣悪な生活條件の本質にふれてみたいと思う。

ハモンド夫妻も指摘しているように、都市の問題に、當時の人々の關心をあつめたのは一八三二年のコレラの流行であつた。産業革命の結果として、労働者は多く都市に密集して生活を營

宅の状態はつぎのようであつたといわれる。<sup>(16)</sup>

検査された家の数	六、五二	漆喰をぬる必要のある家	二、五五	修繕されてない家	九六〇	風通しが悪い家	九元	ほしめつない家	一、四三五	換氣の悪い家	四三三	便所のない家	二、三三
----------	------	-------------	------	----------	-----	---------	----	---------	-------	--------	-----	--------	------

この表を見ると、「漆喰をぬる必要がある家」の数と、「便所のない家」の数、そして更に、「ほしめつない家」の数が、非常に多いのに気がつくであろう。そしてとくに、「便所のない家」の数が總数の三分の一にも達するのを知つて、奇異の感にうたれるにちがいない。だが人間の體内から排泄される汚物はかりかマンチェスターやバーミンガム、そしてリーズやリヴァプールには、ゴミや不用物をどこへ捨てるかが、非常に大きな問題であつた。これについて、ハモンド夫妻はつぎのような興味ある事實をわれわれに教えてくれる。「その町に各々一萬八千人もいるという、マンチェスターとリヴァプールの地下室の住居人たちは、どんな種類のどんな廢物をも、捨てる場所はなかつた。それは街路か、もしくはほとんどの路地のすで一杯になつていない、その町の労働者階級の大部分は、同じような状態であつた」と。また、濕っぽい風通しの悪い部屋については、窓税によつて、窓をつくるのが非常に制限されたことを、ハモンド夫妻は指摘している。「一八二五年以來、八つ以下の窓しかない家は、課税を免除されたという事實にもかかわらず、窓税

一八三〇年代におけるイギリス労働運動

まねばならなくなつたが、注目すべき事實は、それとともに、このような工業労働者が生活のために必要とされる日用品や、その他のものを生産する多くの職業にたずさわる人々が、次第に増大したことである。このようにして人口の増加は、工業都市とくに北部のリーズやマンチェスターなどにあつては、さげたい運命であつた。人間の増加にともなつて、もつとも問題となるのは、いうまでもなく住宅問題であるが、労働者にとつては、彼等の家は住居であるよりは、むしろ豚小屋にひとしかつた。人間の生活にとつて、住宅のもつ意味がどんなに大きいかは更めて云うまでもあるまい。「農業地方やアイルランドから狩り集めてきた労働者群に、雨露をしのがせるために……この豚小屋のような家屋を、人間に住居として高價な家賃で賃貸しさせ、貧困な労働者の掠奪を可能にし、數千の生靈に、その健康を危険ならしめた」と、エンゲルスが言つていっているように、一八三〇年代における工業労働者の住居は、きたなく、せましくしめつぽくそして暗かつた。しばしば貧民窟といわれるこれらの労働者の住宅街は、非常に複雑であり、おどろくべきことは例えばマンチェスターでは、その裏町にゴミゴミと立ち並ぶ家には、大抵地下室があつて、そこにはまた、きわめて生活程度の低い人々(still lower class)が住んでおり、マンチェスターだけで、その人々の数は二萬人にのぼつたといわれる。また一八三二年、特別保健委員會(Special Board of Health)の統計の示すところによると、マンチェスターにおける労働者住

三七 (四五九)

〔三〕 アイルランド人の移住とその影響  
 われわれが普通に移民と云つた場合、まづ考えられることは先進國から未開國への移民である。これはしばしば帝國主義的な植民政策によつてささえられてきたことは云うまでもない。だが資本主義形成の途上において、一つの強大な資本主義國が生産様式のおくれた他の民族を搾取し、收奪しそして貧困化の運命におとし入れたとき、土地をうばわれ、故郷を追われたこれらの被壓迫國の人民はどうしたであろうか。アイルランド人が生れ故郷をすて、海をこえて英本國にわたつてきたとき、これらの土地をうばわれた農民たちの大部分は、何よりも英國政府および資本家階級によるはげしい壓迫の結果であり、先例のないほどの失敗の結果であつたことは、たとえば、かつての帝國主義日本が、朝鮮民族にあたえた迫害、壓迫そして侮蔑を想い出させるものがある。従つて英本國の支配階級が、やがては、これらのしいたげられた人々によつて脅威をあたえられ、仕返しをうけねばならなかつたことは、まことに自業自得と云わねばならない。

ともあれ、一八三〇年から四〇年にかけて、アイルランド人は、大都市にどのくらい住んでいたのであるか。ハモンド夫妻によれば、一八四一年、アイルランド人の数は、マンチェスター全人口の約一割、リヴァプールの人口の七分の一をしめていたし、またランカシャー州への移民は、十三萬三千人に達し、一八四一年から五一年までの十年間、英國に流入したアイルランド

人の数は、五〇萬にのぼつたといわれる。またそのときまでにランカシャー州におけるアイルランド人の人口は、二〇萬に達しこれらの人々は、當時百萬を餓死させたといわれる、アイルランドをおそつた飢饉から逃れた人々であつた。そしてリヴァプールには、街頭をさまようルンペン・プロレタリアとしてのアイルランド人が、みちあふれたといわれる。リヴァプールの當時の有名な醫者ダンカンは、「アイルランド人は、きれいな空氣の通う建物のなかと同じように、よごれた不潔な密閉したところに満足しているように見える」と。またエンゲルスによればロンドンには十二萬、マンチェスターには四萬、リヴァプールには三萬四千、プリストルには二萬四千、グラスゴーには四萬人、エジンバラには二萬九千人の貧乏なアイルランド人が住んでいたといわれ、またカーライルは肩をひそめてつぎのように云つてゐる。「あのひどいぼろにくるまつて、あの粗野な冷笑をいだいて、非常に頑強な腕と肩とを要求するあらゆる仕事を——賃金、じやがいもだけしか買えない賃金をもらつて——彼はやつてのけるのだ。藥味には鹽だけでも上等すぎる。『一番上等の』豚小屋のなかでも大小屋のなかでもかまわない。大變満足してゐる。納屋のなかにねぐらをつくる。ぼろをかぶつてきてゐる。着物をきたりぬいだりすることそのことが、そもそも厄介至極な動作なのだ。お祭りの日か、とりわけ景氣のいい日でなかつたら、ぬいだためしなした。こんなひどい條件では労働することのできないサクソン人は、糧食の途を失う。や

ばんなアイルランドは、自分の實力によるのではなく、その反對のものによつて、サクソン人を放逐し、その地位をうばつてしまふ……アイルランド人——お墮落と無秩序との成熟した分子……」と。

以上によつて、讀者はアイルランド人労働者の、みじめないたましい様子を想像しえたであろう。だが悲惨な生活、いやしむべきどん底の生活を強いられていたのは、ひとりアイルランド人ばかりではなかつた。工業労働者も農業労働者も、程度の差こそあれ、その生活の悲惨なことではかわりなかつた。云いかえれば、「チャーチストの時代」とは悲惨と陰うつと絶望の時代であつた。しかもこのような不潔と兇惡とたい敗のなかから、あのたくましいチャーチスト運動がおこつたのは何故であらうか。

- (1) J. L. Hammond and Barbara Hammond: The Age of the Chartist, 1832—1854, 1930.
- (2) Eden; The State of the Poor, 3 Vols, 1797.
- W. Ashley; An Introduction to English Economic History and Theory.
- S. Webb; English local government: English Poor Law History: Part I.
- (3) マルクス、資本論、第二分冊、七一五—一六。
- (4) Webb; *ibid.*, 272.
- (5) Hammond; pp. 58—59.

一八三〇年代におけるイギリス労働運動

- (6) G. D. H. Cole; The Life of William Cobbett, 1927, p. 415.
- (7) Hammond; *ibid.*, pp. 61—63.
- (8) Hammond; *ibid.*, pp. 63—64.
- (9) Hammond; *ibid.*, p. 65.
- (10) エンゲルス「英國労働者階級の狀態」竹内譯、九五頁
- (11) 三田學會雜誌、四十七號、第五號、拙稿。
- (12) Hammond; p. 79.
- (13) エンゲルス、前掲書、七七頁。
- (14) Gaskell, Manufacturing Population of England, 1933, p. 134.
- (15) Gaskell, *ibid.*, p. 133.
- (16) Hammond; pp. 87—88.
- (17) Hammond; pp. 84—86.
- (18) Hammond; p. 89.
- (19) エンゲルス前掲書、八〇頁。
- (20) Carlyle; Past, Chartism and Sartor Resartus; 1871, pp. 322—330.